

鹿児島県連合校長協会賞

親切の循環

鹿児島大学附属中学校 一年 田野 優月

「ありがとうございます。」

運転手の方に深々とおじぎをし、お礼を言う。私は、この光景を、口をあぐりと開けたまま見ていた。その子は、何事もなかったかのように去っていく。私には、その子が輝いて見えた。私も、その子のようになりたいと思った。

私は、父の仕事の都合で、いろいろな県を転々としてきた。その中で、鹿児島の人に衝撃を受けたのが、この光景だった。横断歩道や信号のない道路を渡るたびに運転手の方が止まってくれると、きちんとお礼を形にしているのだ。私は今まで、渡る前に軽く会釈をする程度だったが、感謝の気持ちは伝わっていると思っていた。しかし、あの光景を見ると自分が恥ずかしくなった。

このことについて、普段よく運転

している父と話してみた。すると、おじぎをされると、心が洗われたような気もちになり、おだやかに運転ができるのだそうだ。そして、

「お礼をつたえてくれてありがとう。」

という気もちや、横断しようという人がいたら、

「止まって安全に渡らせてあげたい。」

という気もちが生まれるそうだ。つまり、親切をした方も、された人のような、心の底からぼかぼかする気もちになるのだ。

私の父が生まれ育ったところで、渡った後に、きちんとおじぎをし、感謝を伝える習慣はなく、そういった光景はみかけないらしい。そ

して、信号のないところでは、横断しようと待っている人を見ても、止まることも少ないそうだ。これを聞いて、感謝を形にして表す人がいて、また、それを受け止める人がいる。そこに、親切が成り立つのだと思った。いくら親切にした人がいても、されたと思う人がいなければ、親切は続かない。親切にされたと思ったら、相手に感謝を伝えていく。そうすることで、

「親切にして良かった」

と思い、自分も人に親切にしたいと思うのだ。これこそ、私は、「親切の循環」が行われている姿だろうと思った。「親切の循環」は、人の気もちを温かくし、そこに流れる空気さえも変えてしまうのだ。

そこで、私も、止まってくれた運転手の方に、おじぎをし、

「ありがとうございます。」

と言うことにした。しかし、いざ、やろうと思っても、ほんの少しの勇気がなかなか振りしげれない。それ

でも、勇気を振りしげって、おじぎをしてみた。すると、運転手の方もにっこりとし、軽く頭を下げてください。そのとき、じんわりと温まるようなうれしい気もちになった。そしてこれを機に、これからもきちんと感謝を伝えたいと決めた。

私はこういった振る舞いが自然にできるような人になり、「親切の循環」を生み出し、そして、つなげていけるような存在でありたい。「親切」はいつも「私の心」から生まれるのだ。

【審査評】

「親切の循環」という発想がこの作文の土台となっています。その土台を支えるエピソードが、横断歩道で止まってくれた運転手に対して歩行者がするおじぎです。鹿児島では目にする機会がよくありますが、県外では当たり前の行為ではないことがこの作文からわかります。親切の循環が行われていくには、それを生み出す人と、つなげていく人の存在が大切で、そういう人であり続けたいと願う田野さんの思いが素敵です。